
東方戯言記

青蒼 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方戯言記

【Zコード】

Z0225M

【作者名】

青蒼 藍

【あらすじ】

暇で暇でたまらなかつた八雲紫が戯言シリーズの世界の人間たちを次々と幻想入り。

幻想郷の人々（妖怪達）と戯言シリーズの人々はどうかかわっていくのか?????

「ああ、なにか面白ことは無いかしら」

最近は幻想郷では何も起きなくてつまらない。

「別にいいじゃないですか。それに暇なら結界のまつをしてください。紫様」

「それは藍がやっているからいいじゃない。ああ、何処かに面白いことないかな」

なんかないかな。

「全くだらけていないで、しっかりしてくださー」

「そつまつと藍は家事をしに家の中に消えていった。

藍も行かやつたから暇なのに暇にならやつた。

「なんか適当な人間達でも幻想郷に招いてみますか」

「これで少しは退屈じゃなくなるといいんだけど。

お知らせ

この小説についての説明

舞台：幻想郷各所

登場人物：東方キャラ、戯言キャラ、人間キャラすべて

基本は戯言のキャラが幻想入りする話です。

そこで読者のみなさまに希望を取りたいと思います。

戯言のキャラ・人間のキャラを幻想郷の誰の所に落として欲しいですか？

例

いーちゃん×霊夢・バトル博麗神社

哀川潤×レミリア・紅魔館

玖渚友×霧雨魔理沙・森（冒険）

など

このような感じに書いてくれればそれを小説にします。

戯言キャラ○人間キャラ×東方キャラ - 場所(内容)を書いてコメントしてくれればいいです。

たとえ原作で死んでしまったキャラでもOKです。

でも、名前しか出でこないキャラはやめてください。
かけないので。

それだけはたくさん希望が来る」とを祈つて

お知らせ（後書き）

もしも希望が無かつたら、作者が勝手に考えます。

一様、次の更新は7月1日です

アンケート

今までにきたリクエストと作者が考えた組み合わせと発表します。
まだ決まっていないところは「？」で表示しますので希望があれば
感想に書いてください。

あとリクエストは随時受け付けているのでどんどん書いてください。

それでは発表です

| 内容 | 胡 | ほ | ぼ | のぼ | いーちゃん | いーちゃん | キャラ | キャラ | キャラ |
|-----|---|---|---|----|-------|-------|-----|-------|-----------|
| 八雲紫 | | | | | | | 八雲紫 | 東方キャラ | 戯言シリーズキャラ |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |

6： 浅野みいこ

勝負

魂魄妖夢

剣

7： 佐代野弥生

西行幽々子

食事

8： 右下るれろ

アリス・マーガトロイド

？」

9： 哀川潤

風見幽香

勝負

10： 絵本園樹

八意永琳

病院

11： 千賀ひかり
のぼの

八雲藍

ほ

12： 紫木一姫

ルーミア

」

？」

13： 萩原子萩

？」

」

14： 閻口崩子
十六夜咲夜

チルノ

」

15： 零崎軋識

？」

」

？」

16： 玖渚友

上白沢慧音

」

？」

17：想影真心

博麗靈夢

ほ

のぼの

18：西東天

八雲紫

「

19：葵井巫女子
のぼの

東風谷早苗

ほ

20：西条玉藻
「？」

フランドール・スカーレット

以上20個が暫定です。

アンケート（後書き）

名前打つの疲れた。

漢字難しそう。

1幕 欠陥製品と大妖怪・1・（前書き）

正直かなり書くのが怖いですけど頑張つて続けて生きたいと思います。

どうか、読んでみて下さい

0

幻想？

現実？

両方とも同じものだ。

1

「ここは何処だ？」

確かに、戯言遣いことぼくはいつもの通りアパートの自室で七々見から借りた本を暇をつぶすために読んでいた。

そして、気がつくとここに居た。

「僕には夢遊病では無いと思つのだが」

ここは何処なんだろ。どこかの家である事には間違いない。

今、僕が居るのはどこかの家で今まで布団に寝かされていた。

「あら、起きたのね

そこには妖艶な女性が居た。

「あなたは誰ですか」

「私はハ雲紫」¹／普通の妖怪よ」

「紫さんですか」

ぼくの反応に驚いたのか田を丸くしていった

「私は人間じゃなくて妖怪だけど驚かないの？」

「いえ、驚いていますよ。ただその驚きが顔に出ないだけです。それにしても妖怪って本当ですか？」

確かに驚いている。

「ふーん。そうまあ良いわ。最近暇してたのよ。あなたは中々面白が」

「でも、なんとなくだがそんな感じが。哀川さんや真心に通じる何かが」

「うだわ」

嫌な予感はする。

まるで、哀川さんにいじめられる直前みたいな気がする。

「あのー。紫さん、ちょっと聞きたいことがあるんですけど良いですか」

「良いわよ。なんでも聞いて頂戴。でも、あなたが一方的に質問し

て私が答えるだけではつまらないから」せせりに質問し答えた
ましょ」

なんだか兎吊木と話した時を思い出す。余り思い出したくないが。
「分かりました。それでいいです。じゃあぼくから質問するけどいいですか？」

紫さんは笑いながらじらじらを見ていた。

「駄目よ。だつてあなたさつき私の名前聞いたじゃない。だから次
は私の番よ」

さつきのも入つていいのかよ。無性に突つ込みたかった。

「それじゃあ。どうだ。でも紫さんがぼくに聞きたいことがあるん
ですか？」

「あるわよ。たくさんは無いけど。それではまずあなたの名前でも
教えてもらおうかしら」

「それは無理です。ぼくは自分の名前を他人に教えない主義ですか
ら」

「そう変わった主義ね。まあいいわ。だつたら他の人はあなたのこ
とをなんて呼んでいるのかしら」

いつくん。いー兄。いーの。いーいー。いのすけ。いつきー。いの
字。いーたん。戯言遣い。詐欺師。

「なかなか色々あるわね。じゃあ私はこいつらと呼ばせてもらひわ

「お好きにどうぞ。じゃあぼくから質問ですね。ここは向處ですか」

「

「私の家よ。それだけなら。次は私の番ね。あなたは妖怪のことはどう思つ?」

「妖怪ですか。それあなたのことはどう思つ? ですか?」

「一般的に言う妖怪のことで、私のことじやないわよ。心配しなくてもあなたが私のことが好きなのは言葉にしなくともわかつんと私は伝わつているわ」

「この女はいや妖怪に性別はあるのか? どうかして人をからかって遊んでいやがる。」

「別に特になんとも思いませんよ。妖怪なんて所詮はまやかしで宇宙人と大して変わらないと思つていますからね。たとえ、自称妖怪がぼくの前に現れてもそれは変わりません」

「それはつまり私のことも実は頭の可笑しなった電波女とでも言うのかしら?」

「アリمامでまこませんよ」

「わ。まあいいわ。あなたの番よ」

「何でぼくはあなたの家にいるのですか?」

「これが一番ぼくが聞きたかったことだ。

自分が何処にいるのかよりもなぜいるかのほうが重要である。

「本当はそつちのほうが先に聞きたつかつたんでしょう。簡単なことよ私があなたを連れてきたからよ」

「なんですか」

「あらあら、いらっしゃん。今度の順番は私の番よ。それともこの程度のことで混乱しちゃったのかしら」

しまった。思わず先を聞きたい一心でやってしまった。

まだ素性も良く分からぬ相手の前で冷静さを欠いてしまつて駄目だ。

「すみませんでした」

「別にいいわよ。気にしないから」

そう言いながらもハ雲紫は勝ち誇った笑みを浮かべてこちらを見ていた。

1幕 欠陥製品と大妖怪 - 1 - (後書き)

何とか書けました。

感想を求めます

2幕 一少女趣味『ボトルキープ』と騎靈二姉妹 - 1 - (前書き)

前回は一話完結でしたが今回は二部か一部構成になります

- 0 -

音を奏でる」とと音楽を奏でるとの差は騒音と好音ぐらいこの差がある

- 1 -

「お姉ちゃんなんか人が倒れていますよ」

私、メルランはお姉ちゃんであるルナサと一緒に今度やる演奏会の会場の下見に行つた帰りだった。

その道中折り目正しい燕尾服を着た男が倒れていた。

「とりあえず、息もしてますし、心臓も動いているから死んではいいみたい」

ルナサ姉は男の人口の辺りに手を近づけたり、胸に手を当てて確認していた。

「でも、ここに置いて行つたりしたり妖怪に食べられちゃうよ」

「はあ、遠まわしに連れて行こうつていいの？」

「さすが、お姉ちゃんちゃんと分かっているー」

ルナサ姉は溜息をつきながらも倒れている男の左側に回り、肩に手を回した。

「あなたもぼさつと見てないで逆側を持つて」

「はい——」

私も男の人の肩を担いで二人で廃洋館に帰つて行つた。

「う、ここは何処だ」

僕は気がつくと見知らぬ家の見知らぬベットに寝かされていた。

確か、僕はいつも通り自分のピアノバーで演奏していたはずだ。

ここは僕が知つてゐるところではない。

「でも、この家の雰囲気は悪くない」

なぜだが分からぬがこここの家には僕にとつてとても居心地が良かつた。

とりあえず。誰だかわからないがここに僕を運んでくれた者に感謝しよう。

すこし、この家を見て回りつゝと思つて、ベットから起きて部屋を出た。

扉から出て階段を下りる。

一階のフロアに出てみるとそこには大きなピアノが置いてあった。

「なぜこんな所にピアノがあるんだ。だが悪くはない」

僕はピアノを軽く引いてみた。

「随分古いものだが調律も手入れも完璧だ」

ここまで、見事なピアノを見たのは初めてだ。

そして、ピアノの椅子を引きその椅子に座り、僕はピアノを弾き始めた。

「誰かがピアノを弾いてる

」「え?」「

ルナサ姉が言った一言に私とリリカは驚いた。

そして、よく耳を澄ますと確かにピアノの音が聞こえる。

それもとつとも上手な音が。

「ねえ、行つて見よつよ

リリカがそう提案した。

「そうね」「そうだね」

私たち三人は一緒にフロアに行つた。

そこにはさつきこの家に運び込んだ男がとても見事な演奏を奏でていた。

2幕 一少女趣味『ボトルキープ』と騎靈二姉妹 - 1 - (後書き)

書くのが結構大変です。

なんか毎回後書きに愚痴を書いてる気がします。

でも本当にクロスオーバーの小説って大変ですね。

他の作者の皆さんとてもすばりと思ってます。

2幕 少女趣味『ボトルキープ』と驕靈三姉妹 - 2 - (前書き)

更新が不定期になってしまって申し訳ない。

でも、できるだけちょくちょく更新したいと思います。

- 2 -

ピアノを弾き終えると近くには二人の少女が立っていた。

「勝手に弾いてしまってすまない。しかしこんな見事なピアノを見たらつい弾いてみたくなってしました」

「別にいいわよ。確かに下手な演奏をされたら迷惑だけどあなたの演奏はそのとっても上手だつたから」

三人の少女の中でバイオリンを持った金髪の少女が答えた。

「そうか。ありがとう。それで少し聞きたいことがあるんだけど

「それじゃあ。リビングに行こう。お兄さん名前は？」

今度はトランペットを持った水色の髪の少女が聞いてきた。

「僕の名前は零崎曲識。君たちは？」

「私たちはブリズムリバー三姉妹。音楽家だよ」

今度は何も楽器を持つていらない茶髪の少女が答えた。

「それじゃあ。自己紹介も済んだところでリビングに行きましょうか

最初に答えた金髪の少女が言う。

それに僕も残りの2人の少女も従い付いて行く。

「つまりここは僕たちの世界には変わらないが普通は絶対に行き来することができない世界それがこの幻想郷であると」

「そうです。たぶん曲識さんはハ雲紫によつてこの世界に幻想入りさせられたのだと思います」

リビングに場所を移し、この世界のことを聞くと金髪の少女ルナサが説明してくれた。

「そうか。なかなか悪くない」

僕が説明されたことを納得していると水色の髪をした少女メルランが尋ねてきた。

「ねえ。曲識さんは何の楽器が得意なの。やっぱりピアノ？」さつきはひとつも上手かつたもんねーーー！」

「いや、楽器全般ならどんな物でも弾けるし、叩けるし、吹ける」

そう言つとメルランの目がさらに輝きを増す。

「スゴーイ！！！ どんな楽器も使えるなんて本当に人間？！」

「メルランはしゃぎすぎよ。まあ確かに私たちでもすべての楽器を扱えるわけじゃないからすごいわね」

騒いでるメルランを姉のルナサが嗜める。

そんな微笑ましい光景を見ていると殺人衝動が湧いてくるが僕はそれを押さえ込む。

確かに彼女達は僕の条件を満たすがそもそも彼女達は人間ではない。

元人間の現幽霊である。

彼女達からこの世界のことを聞いたとき彼女は自分達が人間ではないことも教えてくれた。

殺人鬼とは人を殺す鬼だ。

幽霊を殺す、すなわちそれは魂を刈るそれは石嵐の仕事だ。

ゆえに彼女達は殺さない。

「どうしたの曲識さん。急に黙つてしまつてそんなにメルランが五月蠅かつたのかしら。だったら謝るわ」

「いや、そんなことは無い。全然まったく悪くない」

「そうですか。だつたらいいですけど」

ルナサは胸を撫で下ろしたようだ。

「ねえ、曲識さん。行くところないんでしょ。だったら家に留ていい
」

メルランがそう提案するとルナサと茶髪の少女リリカも言った。

「わうね。曲識さんが良ければいいですよ

「私はいいわよ」

僕は少し悩んだものの行く当ても無いので

「すまない。厄介になる」

と言い切つたときリリカが

「ねえ、曲識さん。私たちと一緒に演奏会に出ない?」

2幕 少女趣味『ボトルキープ』と驕~~嬌~~三姉妹 - 2 - (後書き)

リリカが最後が最後になるまで殆ど空氣でした。

満遍なくキャラを出したいんですけど、どうも三人の口調の違いが上手く表せませんでした。

本当に小説を書くのって大変ですね。

さて、曲譜編。

次でラストかも?

2幕 少女趣味と騎靈三姉妹・3（前書き）

4か月以上も放置してしまつてすいません

今後はこんな事にならないように努力していきたいです。

それでは曲識と三姉妹の最後のお話を楽しんでください。

- 3 -

「演奏会?」

「やうやう演奏会。曲識ばどの腕前なら私たちと一緒に演奏会に出て見ない?」

リリカはやう言つて他の二人も賛同するよつて声を上げる。

「それはいいね!曲識さん、一緒に演奏しようよ!」

「確かに曲識さんやえ迷惑でなければ私たちと一緒に演奏会に出てくれないかしり?」

「それはいいが、僕みたいな者がいきなり急に出てもいいもののか?」

演奏会に出てること自体は全く嫌ではない。

むしろ演奏を大勢の人に聞かせること樂器を演奏する者にとって喜ばしい事ですしかない。

しかし、その演奏会に来る者たちは皆彼女たちの演奏を聞きに来るのであって、その中で僕のような者が弾いてもよいのだろうか。

「そんな事を気にしてくるの?」

僕の言つた事に対し、ルナサは呆れたように言つて、そして続ける。

「安心してくださいよ。演奏会に来る人間は皆楽しく聞ければいいんですよ。それに毎回毎回同じ者の演奏を聞いても飽きるに決まつているじゃないですか。だから、あなたのよつた新要素が必要なんですよ」

「やうだよ。曲識さんが演奏してくれたら私たちだけじゃなくてお密さんも喜ぶよ」

「何を心配しているのか知らないけど、あなたの演奏ならどんな人間でも満足させられると信じられるから演奏会に誘つたのよ」

ルナサに続き、メルランとリリカにも言われた。

「こまで言われてしまつた以上僕は演奏会に参加することを了承した。

「僕でよければ、君たちの演奏会に参加をしてくれないか?」

「もちろんよ」「いいに決まつてるわーー」「お願いするわ

三人の同意を得て、僕らは一週間後に演奏会を行うことになつた。

「曲識さん、準備はできてる?」

「ああ、何時でも平氣だ」

いよいよ、演奏会の開始直前。

「週間は殆んど彼女たちと一緒に練習をしてきた。

「それじゃあ、観客の皆さんに楽しんでもらこましょ。」

「そう言いながらルナサは舞台に出て行く、それに続くメルラントリリカも舞台に出て行く。

三人が出て行き、一曲目の曲が始まる。

僕が出るのは三曲目から、それまで少しだけ時間がある。

三人の演奏をゆっくりと聞いていたが、ビリやア無理やりしい。

「出できたら、ビリだ？ わざからこそと隠れているみたいだけど何だい？」

「そう言つと殴打ちをして、後ろから男が出てきた。

「「」は関係者以外は立ち入り禁止だ。帰った方がいい」

「そう言つあんたは何者なんだよ。」は関係者以外立ち入り禁止なんだらだったらあんたこそ出て行くべきじゃないか」

「僕は関係者だ。」の後彼女たちと一緒に演奏する者だ。さあ、僕は説明したぞ。君は一体何をしにこんな所に来たんだ？」

男は怒ったような口調になり声を荒げて言つてきた。

「俺はなあ最近この幻想郷入りした演奏家なんだよ。この世界で演奏してやろうと思つたらこいつら居るから俺の演奏を誰も聞こえんだよ。だから、この演奏会もぶつこしてやろうと思つたんだよ！……」

「それで君たちは何をする気なんだ？」

「わっさきまではここにある楽器を壊そつと思つたけど気が変わつたぜ。あんたをボコボコにわせてもらうぜ。共演者がボロボロになつたとなれば演奏会も潰れるしな、それにわっさきからてめえの話しが気に食わねえんだよ！……だから、悪いけどあんたボコボコにさせてもらひざ」

「君は他の人に演奏を聞いて欲しいと思つ気持ちは悪くない。ああ、悪くない。だがそれだけで演奏家と自称する君は楽器を傷つけようとした。それは音楽家として見逃せるこじじゃない。だから、君たちを殺そつと思つたんだが、残念なことに君は条件を満たしていない。だから、殺すのは我慢してやろう」

「何を意味の分かんねえ事を言つてんだ？ いい加減うつせんだよ！……」

「無駄な事は止めるんだな。君はもう動けない

「あがつ！……！」

「僕は音楽家でもあり音使いの殺人鬼。君たちは僕の声を聞きすぎた。もうその身体は僕の思いのままだ。さつさと氣絶しろ。本当は殺したいんだが、僕は少女趣味零崎曲識。^{ボトルキープ}少女以外は殺さない」

男はそのまま地面に倒れ込み動かなくなつた。

「曲識れん。出番ですよ？ そんな所に居ないで早くしてくださー」

「ああ、ルナサ。今行こ。君たちとの演奏は悪くないからな」

「うー、ルナサと共に演奏会に出て行く。

彼女たちとの共演に胸を膨らませながら。

2幕 少女趣味と騎靈二姉妹・3（後書き）

次回は澄百合学園の面々×紅魔館面々です。

今度はあまりお待たせしないようにしたいです。

感想ややつて欲しいクロスオーバーが在つたらどうぞ言つてください。

作者の実力で書けるものなら頑張つて書きますのでよろしくお願ひします。

3幕 「策士ヒメイド」（前書き）

今日は早く更新出来たぜーーー！

3幕 「策士とメイド」

- 0 -

化け物と人間の違いは考へることである。

すなわち考へない人間と化け物は同じである。

- 1 -

まつたくこには何處からしら?

気が付いたらこに居たなんて台詞を私が言つことにならうとは思
いもよらなかつたわ。

「本当にこには何處なのよ」

とりあえず状況を整理して今の状況に一番適した策を考えなくては。

何時も通り澄百合学園の寮の自室で寝たはずなのに気が付いたら森
の中に居た。

「昨日は疲れていて、制服のまま寝てしまつたから服が寝間着で無
いのはいいけど。とりあえず人家でも探すべきかしら?」

今、私が行える最善の策は現状の状況の確認のための情報収集を行
う」と。

「この明らかに電子機器の類が全く使えない空間において、情報を得る為には人家を探すしかない。」

「でも、何処に行けば人家があるのか全く見当もつかないわ」

闇雲に歩き回るのは柄ぢやないけど仕方がないわね。」

「しょうがないけど私は闇雲に当てもなく歩き始めた。」

「とっても趣味の悪い屋敷ね」

「一時間以上かかってようやく見つけた屋敷はとても豪華な洋館だつたけど、何もかもが紅かつた。」

「文句ばっかり言つても始まらないわね。とりあえず、これだけ大きな屋敷なら門から入るのかしら?」

塀に沿つて歩いていけば門に辿り着くでしょ。」

そのまま再度歩き始めると門はすぐに早く見えてきた。

其処には門番らしき女性も佇んでいたので頼んで中に入れてもうつことにした。

「すみません、私道に迷つてしまつたんですけど、ここが何処だか教えてくれませんか?」

返事が無い。この距離で聞こえないわけがない。

無視されているのかと思ったがよく耳を澄ませてみると寝息が聞こえてきた。

「立つたまま寝るなんて器用な人ですね。起こすのも悪いですし、勝手に中に入らせていただきましょう」

一応寝ている門番に一声かけてから、門の中に入つていく。

ちゃんと手入れされた庭を横目で見ながら真っ赤な屋敷の扉をノックした。

コンコン。

軽い音が響き渡る。

そして、ノックをしてすぐに扉は開いた。

「こ」のよつな時間にどちら様ですか?」

出てきた人は銀色の髪にメイド服という奇つ怪な格好をしていたが、醸し出している雰囲気は殺し名や呪い名の連中と同じものだった。

この女はヤバい。

出来るなら関わりたくない相手ではあるが、今は状況が状況しかたがない。

「夜分遅くにすみません。私、道に迷つてしまつたんです。ここが何処なのか教えてくれませんか?」

なるべく下手に出て、早く必要な情報を得てここから離れまじょ。

「あなた。幻想郷の人間ではないわね。格好から見るに外来人？」

「外来人とは何ですか？」

「あなた何処から来たの？」

私の質問には答えず、むこうから新たな質問を浴びせられる。

「こで答えないと話が続かないのしようがない向こうの質問に答える。

「澄百合学園の寮からです。気が付いたら森に居て其処から歩いてきました」

「やつぱりね。はあ。まったく面倒なことになつたわ」

いきなり溜息をつかれ、そのまま本当に困つたような顔している。

「ちよつと待つてなさい」

そう言つと一瞬にしてその場から消えた。

「一体どうなつているのよ。訳が分からないことが多すぎるわ

何が起きたのか全く分からない。

それきまで其処居たはずの人間が唐突に一瞬にして消えた。

そんなことは起きるはずがないのに、それが自分の眼の前で起きている。

「理解が出来ないわ」

「それは何が一体理解できないのかしら？」

またしても一瞬の間に現れた女は私にそう聞く。

「何もかもですよ。一から十まで何もかも。全てが理解できないんですよ。あなたは何か知っているみたいですね。出来れば教えてくれませんか？」

私は冷静さを欠かずこそう答える。

「安心しなさい。ちゃんと説明してあげるわ。その前に家の中に入つてくれないかしら？ そうすれば私が答えられる範囲でならあなたの質問に答えてあげる事は出来るけどどうする？ 別にあなたこれから出て行くのを私に止める権利はないからこの家から出て行つても何も文句を言う事はないわ。只、ここら辺にこの紅魔館以外に人間が住んでいる所はないわよ」

つまり、出て行くのは勝手だがここを出て行つたら情報も得られないと言つてますか。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

ここは賭けるしかないですか。

「それじゃあ家の中に招いてくださいありがとうございました。メイドさん」

「私は十六夜咲夜。あなたは？」

「私は萩原千尋です」

「そうですか。それじゃあ、萩原さん。ようこそ紅魔館へ」

そう言い咲夜さんは家の中に入つて行った。

私もそれに続くよにして家の中に入つていた。

3幕 「策士とメイド」（後書き）

まだまだ長く続けるのは無理みたいですね。

今はこの長さが限界です。

澄田百合学園の他の面々もこの後に出ていきたいと思いますけど、3幕の主人公は萩原千子萩です。

それでは感想とリクエスト待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0225m/>

東方戯言記

2010年12月12日22時49分発行